京都帝國大學新聞
（大正十四年四月十五日第三種郵便物認可）昭和九年十月十五日
購讀料 月五十二回 一年前金壹圓 半年五十錢 三ヶ月二十五錢 一回行間一寸 廣告料 金壹圓 半頁五圓 一頁十圓 社友會員は半額 振替口座 大阪一二二〇番 發行所 京都帝國大學新聞社 電話 上局九二一番

天災被害者に 授業料免除の恩典

某教授からの六百圓等 温き救ひ手のびる

わが文學部の 集中的表現！

來月開催諸大會の プログラムさまる

三年に一度の 尊攘堂大祭

來る二十七日擧行

文字通り 大學も街頭へ！

土木工學科の活躍

何名採用される

滿鐵と滿電を目ざした 六十六名の志願者

解剖體祭

來月一日執行

一代の碩學 故内藤博士の

追悼會營まる

秋の一夜を 妙なる樂音に

音樂部定期演奏會は

……來月四日華頂會館で

法學餘錄

獨逸語三千

帝國憲法逐條要義

漁村の更生と漁村の指導

刑法史の或る斷層面

關稅法大意

數學演習叢書 理化

大原社會問題研究所雜誌（月刊）

定期必突破 大學入試文檢

CORONA Model S
英、佛、獨、各國語、各種數、化、工學用、凡て完備
東京銀座 黒澤商店 電話銀座1638
京都帝大前 文進堂 電話上局1678

現下の思想に就て

田邊元教授講演

現實より先に行つてゐた思想

三方面を考へる事が出來る

反對の集團主義に

生きる爲めに

媒介として保

新しきものに

現下の米穀對策に就て

八木芳之助

拙講敷衍

田邊元

國勢調査から見たドイツの人口問題

商學士　塚本義隆

人口の半分、有職

月給取階級の増加

日本の人口問題

嚴松堂書店新刊書　東京帝國大學法學部教授　勝本正晃著（最新刊）
法律より見たる日本文學

地方財政の理論　青木得三著（最新刊）

支那租界論　植田捷雄著（最新刊）

帝國憲法要綱　法制局長官　金森徳次郎著（改訂版）

世界經濟の動向と金本位制度　大藏省參與官　金原賢之助著（好評重版）

債權總論概說　法學博士　勝本正晃著（増訂再版）

高田教授の◇◇「貧乏の話」を讀む

天野貞祐

（中）

教授は初めて「貧乏の話」ということを說かれる。貧乏の苦しさを感ずるのは貧乏そのものよりも、それを比較の對象として人並の優の生活とそれ、これ

クレトパオレラ（パラマウントン映畫）

旅から思索から何を得たか

最近の收穫を語る（2）

雪國の生活を訪ねて

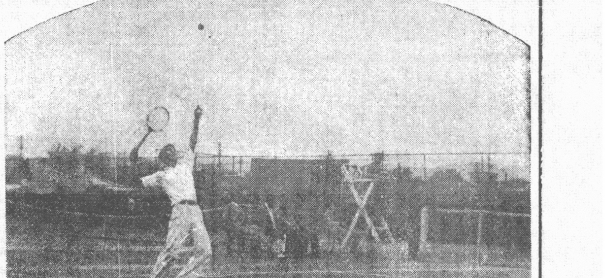
土田英夫

先づ感銘深く入れられるのは雪の中にたゝずむ農家のたゝずまひである。山手、甘藍の畑の續くコロッカの如く、さうした點景物にいひ知れぬ懐しさへ感じるのだ。

雪に埋もれた村、樹氷林立の絶頂から「一段目に上ると、

四勝五敗に終つた 今年の對東大戰

愈よ兩大學の親睦を加へて 秋のスポーツ界を飾る



傳統に鳴る！ 本學柔道連勝す

目醒しき下村の奮鬪

猛烈な粘り合ひ 汗と火華を散らして

東大奮戰して惜敗

滿鮮遠征行 （下）

大野久磨夫

龍虎相搏つ熱戰 劍先火を噴いて

東大軍惜敗す

庭球部敗退す シングルスに潰滅

8—3 奮戰空しく

陸上競技 空前の大差で 本學快勝す

東大軍善戰して玉碎

本學快勝す

はじめて西下した 東京文理大との一戰

鐵道局と決戰 鋭鉾を向ける 朝鮮 けふ花園で興味を呼ぶ

對同志社 アイスホッケー戰

最近の收穫を語る。 死の三原山

中石盧子

法經書の買入値段

◇イデア書房取引相場の一例

16ミリ 小型活動寫眞機

の御用命は 諸官衙、學校御用達の…… 16ミリ活動寫眞機專門店 エヌ・サタケ

各大學、文檢、受驗者に必須缺くべからざる良參考書出づ
浪速高等學校教授 佐伯正二著
最近四ケ年（昭和六、七、八、九年）
大學入試英語問題研究
國費出版・敎科書出版
平野書店
京都市烏丸今出川上ル
振替大阪七四八九番

歐米漫遊と海外留學の洋服はロンドンスタイルの長屋
京大生消耗指定
寺町丸太町南
電話㊀三五〇四

右本の洋服 英法部指定 京大北門前 電㊀㊁2627

國家試驗 高等試驗 司法科 行政科 外交科 領事科 合格者發表號 十月十五日號 定價金十二錢 郵稅金一錢 發行所 京都市上京區 育成洞 電話小川㊀㊁㊂㊃番

文壇最近の傾向

大原外光

大衆文學の問題

「大衆文學は滅びるか」とか「大衆文學とはどういふものか」とか「大衆文學は何故流行するか」とか、とにかく大衆文學についての議論はよく為されたやうだ。しかし、それらの議論が何等かの結果を齎したかといふと、おそらく大衆文學が無用になつたこと、およびかくも「大衆文學」なるものが厳存する理由を明かにしたことは確實である。その「理由」とは、それがよし史上に知られた「人物」を扱つた探偵小説であれ、探偵趣味を含んだ「文藝」小説であれ、要するに「謎」を取つた讀物であるといふことだ。

無力

なぜ大衆文學がいけないかといつて、それは現實の問題を取扱ふ力がないからだ。明日の朝、よつてその中かさを盗まれた、探偵するところの一つの問題をつけることは出來ない。「新しい探偵」とか「新しい探偵小説」とか無責任な文壇の無駄口が絶えないが、それは「探偵」を取つて重ね合せたにすぎない。その証拠には、探偵小説の根本問題たる「謎」は大衆文學にはなくなつたことが「謎」を取つた證據だといふことにならう。探偵小説だけは探偵小説としてのインテリ文學にアピールするものを持つてゐたことだけはたしかであらう。

それだけでも探偵の大衆文學化は無理だつたのである。

だが、無用は無用であるが、いかに大衆文學が無力であらうとも、現在の文壇において存在價値を示し得るのであるまいかと思つてゐる。

人物

それは「人物」を扱つた讀物である。

それだけでも最近の大衆文學化の傾向にインテリ文學にアピールするものを持つてゐたことだけはたしかであらう